潮

「アンテロガシオン」誌のこと

江口 幹

教育ノート・「日の丸」と「君が代」について 北川 鬼太郎

書評 「アナキスト」 宮坂 英一

映画評 「とっかん」 山上 春彦

△核▽抗議船フリー号の意義 戸駒 恒世

論

「アンテロガシオン」誌のこと

江口 幹

近ごろ嬉しく思ったことの一つに「アンテロガシオン（疑問）」誌の刊行がある。

同誌は国際的なアナキズム研究誌で、第一号は昨年十二月刊、第二号もすでにでた季刊雑誌である。刊行事務はパリで行われているが、文字通り国際的な雑誌で、第一号

の執筆者もスペイン人、ドイツ人、イタリア人、アメリカ人といった多様性を見せ、

使用言語もスペイン語、フランス語、イタリア語、英語の四カ国語である。

しかし、私が嬉しく感じているのは、同誌が単に国際的な協力の成果を示している

からではなくて、現在のアナキズム関係としてのもっとも高水準と思われる国際的な執筆者の連携の下に、同誌が目指している意図が、仮に私がいま雑誌を計画するとすれば、まさにこうしたものを考えただろうと思うものに、びたりと合致しているからである。

同誌は煽動宣伝のための雑誌ではない。研究誌である。直接に運動の高揚を狙うものではなく、運動の前提である明確な理論形成のための雑誌である。△声高な▽性格は何一つなく、むしろ△静か▽である。では、なぜそうした雑誌が必要で、「アンテロガシオン」誌はその必要にどう応えようとしているのか。同誌の刊行の辞は、要約すれば次のようにのべている。

アナキズム運動は、明らかにその可能性よりも貧しい現状にある。

運動として、すなわち、社会の変革に介入する意識的必要要素として、運動は、かつて示した力を失っている。探究と発意の中核としても、それは古き時代のたぎるような豊かさを示してはいない。

しかし一方、社会主義の歪曲が進む中

で、資本主義の破局化が進む中で、また社会の官僚化が進む中で、かつてアナキズムに独自のものであった主張が、予言者的な警告として現実性を帯びるにいたっている。

このアナキストたちの警告の現実性と運動の弱さとのずれはなぜか。大部分は工業化社会の変貌によって説明される。

今やアナキズムは、かつて夢に描いた未来に賭けることはできない。アナキズムは、違った条件の下にある現実の中で考えられ、行動し、出現しなくてはならない。それはもはや、昨日真実であったことを繰り返すことに満足していることはできない。それは、今日自分の使命に呼応するものを発見しなくてはならないのである。

したがって、本誌が独自の任務として考えるのは、二十世紀の終りに、絶対自由主義思想に欠けているもの、社会的な闘争に参加しているアナキスト活動家に恐いほど不足しているものを、一つ一つとりあげてゆくことである。

問題は、明晰さという困難な努力にかかっている。第一に、緊密に結びついて二つの現象、国家の役割と新しい指導者階級の形成についてのアナキストの主張の検証と継承的発展とはらうべき努力であり、この照明は、社会的な変動、動労者階級の変化、金と職能の権力の発達についての併行した研究なしには行われない。

このあと刊行の辞は更に、同誌のもう一つの目的、世界的な通信連絡網を作り、商業主義や政治宣伝によって歪曲されることのない、国際的な情報紙になることを目指している、とのべているが、それも結構なことには違いないけれども、私が特に共感を抱くのは、やはり第一の目的であり、現実の分析を通じて、新しい条件の下での国家のない社会主義のあり方を探る、という姿勢、そのために同誌が現になしつつあることに對してである。

同誌は、刊行の辞にも見られるように、国家の役割と新しい指導者階級形成との分析を、当面の任務としているし、第一号の「イタリアの経済復興公社」(アメデロ・

ベルトロ、ルチャノ・ランザ)、
「西ドイツにおける共同管理の経験」(ハイנטツ・ジムメルマン)、
「ソルジュエニーツインの政治哲学」(ポール・アヴリッチ)はそうした線にそった諸論文であり、歴史の歪曲をただす試みである「スペイン共和国最後の数週間」(イグナチオ・イグレシアス)も、同じ系列のものとすることもできる。

そして同誌では更に、六〇年代後半の世界的な若者の反乱がなぜ鎮静化されていたのか、五月革命を中心にして今後回復しととりあげる方針を示しており、日本に對しても、大学闘争の高揚と衰退、経済の中での国家の役割について、現実を具体的に分析した論文を要請してきている。

また同誌の基本的な意図にそって、明春イタリアのミラノで、新しい指導者階級形成をテーマとして、国際的な研究会を開催する準備も同誌では進めている。

同誌の刊行の辞は、同誌の企図について「いうはやすく行いがたい野心的な計画」といっているが、その結語はまた、「諸君の参加を得て、少くともわれわれは行動を開始してみよう。なぜなら、われわれは明晰さのない運動を考えないからである。そ

して、単に否定することは、問題を解決することに「ならない」といつている。

私は、この企図、この試みに全面的に賛成である。できるだけ協力は惜しむまいと考えているが、それ故に私は、同誌の編集者あての手紙の中で、「諸君の、という

教育ノート IV

「日の丸」と「君が代」について

——かうして春はむごたらしい痴呆の笑を齎した——ランボオー「地獄の季節」より

昨年のことである。卒業式に出て式場の正面を向いた時に、大きな「日の丸」の旗が麗々しく飾ってあるのを見て唖然とした。不快感が胸からこみあげて来るので、すぐ外に出た、さいわい該当学年でないのだから支障はないのである。

私自身の「日の丸アレルギー」(?)のせいではあっても、卒業式の前に開かれた職員会議での式次第の議題では「日の丸」

よりむしろ、われわれの雑誌」と書いた。同誌は、すでにのべたように少しも声高なものではないが、その静かな視線こそ、現に人間を抑圧している機構の深部を揺がすものとなること、揺がす重要な芽の一つとなることを、私は信ずる。

北川 鬼太郎

について掲げるとは聞かなかつた(認識しなかつた)し議論(反対意見等)も別に出たり、聞いたりした覚えがないからだつた。

後日、職員室で、ある先生に「日の丸」を式場に掲げてあるので非常に驚いたひねを話すと、やっぱり抵抗感がありますかと返事があり、毎年、掲げるみたいですよと返すので少しあきれたのである。どうも例年の慣習となつていゝらしいのである。

それでは、来年は是非、問題提起をしようとして秘かに決意したのである。確かに、職員会議で、「日の丸」は議論

の対象にはならなかつたが、実は「君が代」については校長・教頭側と数名の教師側とが対立していたのである。

校長は指導要領にも歌う事が望ましいとあるし、国家愛(郷土愛)を育成する為にも望ましいから是非、生徒に歌わせて欲しいと言ふ主張なのである。

それに対して、「君が代」は国歌としての法的根拠はないし、歌詞の内容が、天皇絶対主義に結びつく危険がある、また、民主主義国家として望ましくない等、反論し対立したのである。

しかし結局のところ投票の結果「君が代」は生徒に歌わせないが、プラスバンドで演奏するという妥協案みだいのが決定し、その通りに実行されたのである。

そして今年、卒業式の式次第を決定する職員会議に於いて左記と同様の議論を経て、「君が代」演奏をすると昨年通り決定、但し、「日の丸」については、反対意見が出たので、しばらく、議論になつたが、結局、投票の結果、卒業式に掲げる事に決定、入学式については入学式委員会を作つて、そこで原案を作製する事になつたのである。

その後の職員会議で入学式委員会の原案

が発表されたが、「君が代」演奏をしない、「日の丸」については式場に掲げないとしたので、校長側は原案反対意見を述べるとし、再び論議されたのである。投票の結果は原案可決と出たので校長側は敗北したのであるが、校長の「学校全体の管理責任者」と言う職権で、それは承認しかねると言い、しばらく考えたり、他の学校を調べたり、教育委員会と相談したいむね教員にづげたのである。

それから後、開かれた職員会議にて校長は入学式当日の朝、自分で「日の丸」を掲げるので邪魔しないで欲しいと言明し、それでけりがついてしまったのであり、もう誰も何も言わないので暗黙の承認みたいな形になってしまったのである。

何名かの教師は、割り切れないものを感じてはいるのだろうが、その後だれも話題にはしないのである。

次に学校教育の場で「日の丸」と「君が代」が、どう扱かわれているか簡単にふれてみたい。長野県中学校長会で作製された「二十一世紀への教育の中で家庭、社会、国家の形成者としての日本人の育成」と言

う文章のなかに

国旗・国歌は、国の視覚的象徴・聴覚的象徴である。神話は「国」伝統という民族的自覚と誇りに対して理解と愛情を深めるもので、幼時より接することのできる文化遺産である。郷土や祖先への愛情は、児童、生徒が生まれ育った「母なる国」の基点であり、国民意識、愛国心の母体である。

と書かれているのをみると、校長会の反動的姿勢を如実に示している見事に、文部省の方針と合致している事に驚きを覚えざるはいられない。

この文の後に「国旗・国歌については公的な規定はない」と認め、その上で戦時中の暗い思い出、過去の暗いイメージを捨て去って「新しい日本の象徴」として愛する事が国民意識形成上、重要な事であると主張しているのである。

このような校長会の考えは特別、目新しいものではなく、教育現場の中で、具体的に次のような教材を通して生徒に教え込まれて行くのである。

にっぽんのくにのはたは ひのまるです。くにおいわいの日には ひのまるのは

たをたてます。

にっぽんのふねが がいこくにいくときはには、かならず ひのまるのはたをたてます。どこのくににも くにはたがありません。うんどうかいのときに かざるばんこつきは せかいのいろいろなくにのはたです。「東書国語一年」

この教材を一読すればすぐ理解できる事であるが、「日の丸」をはっきり国旗と規定し、国旗の機能、国際慣習にふれているのである。

この教材には重要な問題点を含んでいるが、全国でどのような授業実践をしているのだろうか。私には一例（『子どもと教育実践』国民教育研究所編）を知るのみである。

さて、次の文章は、一九三六年尋常小修身書巻三にのっていたものである。

どの国にも、その国のしるしの旗があります。

これを、国旗といいます。

日の丸の旗は、日本の旗です。

我が国の祝日や祭日には、学校でも家でも国旗をたてます。

これは、国民が、祝日には、おいわいの

心持をあらわし、祭日には、つつしみの心持をあらわすためです。

日本の船が、外国のみなとにとまる時は、日の丸の旗をたてます。

先にあげた戦後の教科書と右の戦前の修身の本との恐るべき類似にすぐ気が付く事と
思う。

つまり、着々と文部当局と反動的校長会は、行事・授業等のあらゆる機会を利用して日本国家の国民であると言う国家意識形成の注入に努めるべく策動しているのである。

事実、国語以外に、音楽、算数その他の教科書のなかに「日の丸」が多くはいりこんでいるそうであるし、反動的国防教育論の台頭と符合して教科書が変化している事実は、充分注意して行かねばならないであろう。

このような反動的な傾向がある一方で京都府の教育委員会は次の様な

君が代は国歌ではなく、日の丸は国旗ではない。指導要領が改訂されても、各学校の行事などに、これらを積極的に取り扱うよう指示を出すことは考えていない。(一九六八、九、七、指導要領伝

達講習会)

と言う統一見解を発表している事は、「日の丸」「君が代」反対の立場に一つの力に

書評

『アナキスト』(J・ジョル)

宮坂英一

革命に勝利した者たちは、しばしばその勝利者以外のひとびとの、その革命に寄与してきた事がらを、歴史のそとのきわめて暗い墓場のなかに埋めてしまおうとするものである。そしてまた、歴史家も、失敗におわった革命を歴史の袋小路であるとみなして、それをひきおこした人物や思想は、せいぜい特殊研究の対象とされるにすぎないものである。

そして、「一度も革命に成功したためしがない」アナキストもまた、これら歴史家の被害をうけてきた者の一人であった。ジョルは、一歴史家として、この陽のあたることのない、しばしば成功のそれにおとらず、教訓にみちた「敗北の研究」をこころ

なりうる可能性を持っているものと言えるだろう。

み、アナキストの心理と社会の仕組みに、
解明の光をあてようとした。

J・ジョルはD・アプターと共編した『現代のアナキズム』のなかで、アナキストの伝統は三つの異なった方法でみることができると述べている。一つは主義としてである。すなわち、社会組織と社会関係に関する一組の思想としてである。もう一つは運動として、つまり革命の技術としてである。さらにもう一つは、ある種の型の気質としてであり、それは物事をとことんまで推し進め、思想を論理的で実践的な結末まで貫徹させて、社会を上から下までひっくりかえそうとする欲望に基づいている。多くの場合、それは革命の行為それ自体を棄

しんだり、あるいは信じたりし、その後の革命の結果を思いわずらいはしない気質である。

本書のなかでジョルは、アナキストを、この第三番目の、「ある種の型の気質として」とらえることによって、「アナキスト」というラベルがいかに多種多様な思想を包含していたかを示している。アナキストの異常な行動、思想の矛盾は、宗教的と合理主義的、黙示録的と人道主義的という二つの気質の衝突、緊張から生じてきている、と同時に、アナキズムに広範な普遍的な魅力を付与しているのも、この複合的性質であると説いている。そして生きつづけるアナキズムの伝統がもしあるなら、それはアナキズムが栄えた社会の社会学的分析とならんで、社会への心理的・性格的態度のうちを探られるべきであるとする。

ジョルのこの方法は、個的な思想・活動家としてのアナキストを描く場合には、非常にうまく活用されている。たとえば、マルクスと対立していたブルードン、バクーニンを語る部分である。とりわけ個人的なテロ活動、「行動による宣伝」を語る部分は生々としている。しかしながら、サンジ

カリストやスペインのアナキスト（アナキストの努力と矛盾、野蛮と高貴、黙示録的ビジョンと合理主義的確信が最も明確に示されているのは、スペインにおいてであった）を語る場合に、ただ単に「ある種の気質として」みることは困難である。アナキズム運動の最中で活動しているアナキストをとらえるジョルの方法は、明らかに「革命の技術として」不十分のものである。世界的なアナキズム運動通史という一つの貫徹された視点をとることなしに、判断を下しているとみられる点が発見される。

西ヨーロッパ中世の宗教的な異端者達の反抗から、既成の秩序と価値の全面的否定、権威にたいする憎悪、急激な変革が迫っているという信念をみだし、これらの運動のなかに、なにか共通の社会的、あるいは経済的な要因がはたらいていたのかどうかをみきわめるのは歴史家だけの役目ではあるまい。かつまた、このような運動を心理学的（ジョルはこの点で一つのすぐれた方法を示した）、さらに社会学的にみて、一九世紀および二〇世紀におこった革命運動にいかに対比していくかということが、今後、アナキズムを正確にとらえるうえで

キー・ポイントとなるであろう。

いま共産主義的、あるいは革命的な政権（ユーゴスラビア、キューバ、アルジェリアなど）では、ブルードンの時代以来、アナキズム思想の核心的部分、すなわち地方分権と労働者による管理という原理を実現にうつすというところがみられる。これに対して、ジョルはこう述べている。「これらの運動の意味は、アナキストによるレーニン主義的・スターリン主義的な全体主義の批判ばかりでなく、アナキストによる資本主義的な産業社会の批判も、まだ有効なものであることを示している。」

しかしながら、現代のアナキズムはこのような資本主義産業社会および権威主義的社会主義への批判にとどまらず、そのあたらしい側面として、知識人が議論する夢あるいは、理想主義の学生をひきつける、豊かな社会に対する反乱の象徴となった「対抗文化」の思想がみられる。それは組織勢力それ自体をすこしも増大させることなく、その重要性を高めることができたのである。そしてアナキズムは「何でも載せて運べる」規範力となりえて、多様なグループをそれに含めることができる。すでに、新

しいアナキストたちがあゆみはじめている

映画評

『呐喊』 岡本喜八監督

山上春彦

%%%%%%%%%

%%%%%%%%%

最近私が見る映画の作者達がNHKを気にしているのか、私がNHKを気にしているのか、どうもNHK風の手法や配役が映画界には流行しているようで、この映画における語り手坂本九の登用も「八犬伝」風であるのだが、これは官(NHK)の「公序良俗」風伝奇に対する民衆の歴史の提示であるとの皮肉をこめた意志表示なのだろうか(それにしてもこの映画での語り手の登場は必然性があつたのだろうか)。

ストーリーは当然NHK風に展開するはずがなく、一人の良心的官僚によって組織形成されたやくざを主体とする下層市民の自衛部隊(維新内戦において薩長の官軍と抗戦する東北同盟仙台藩衝撃隊IIカラス組)が官僚機構に利用され、裏切られる過程を軸に、カラス組という枠におさまりきれない百姓出身の若者千太と、官軍密偵とい

のだ。(岩波書店刊 一六〇〇円)

う枠におさまりきれない若者万次郎の、性と性の充足を目指した行動を描いている。カラス組出撃の前にも、ラストシーンの砲弾降りしきる会津若松城でも、自らがかつて娼家から救い出した娘おテルと愛の交歓にはげむ千太のバイタリティは、しかしながらそのままでは「時の流れ」の前には何の支えにもならなかったことを、ラストの老婆(坂本九)のナレーションが示している。そう、千太(伊藤敏孝)が「面白いこと」を求めて戦闘に参加し、生き抜く中で何かを見つけたとしても、面白いだけでは問題は解決しないのだ。かといって、シラケたまま一獲千金を狙っても成功しないということを示したかったのがお糸(伊佐山ひろ子)の登場ということになるのだろう。しかし万次郎に情婦扱いにされながらも万次郎が奪った官軍軍資金を更に横取り

しようとするお糸に、いつもの伊佐山の迫力がなかったのは万次郎(岡田裕介)と千太に力点をおいた作品であるためか。

本誌で映画評を行う以上は、何らかの意味で問題提起となりうるような取りあげ方をすべきだと(柄にもなく真面目に)考えたりするのだが、その意味ではこの作品はこの六年間の情況の差異を確認させるにとどまった。被抑圧者側からの歴史の検証とそれによる明治維新の再検討というのは、確かに問題とせねばならない課題ではあるにせよ、また個人の性と生の充足が政治とどのように関わるかも私達にとつての重要な課題であるにしろ、作品自体の持つ迫力や情念が六年前ほど明確に迫ってこなかったのを、すべて情況の拡散のせいにする気はないが、同じような視点で撮られた岡本IIATGの前作「肉弾」が、その公開された時点での情況に切り込むだけの衝撃力のある作品だったとの記憶があるだけに、情況の拡散が作品の切れ味をも鈍くするのかわという感を禁じ得なかった。もっとも、切れ味が鈍っているのは作品ではなくて情況にただよう観客(私)の感性なのかも知れないのだが。

(ATG配給)

△核▽抗議船フリー号の意義

戸駒恒世

ピース・オデュッセイア——西洋文化の中で、聖書とともに欠くべからざる存在となつているギリシャ神話の挿話△オデュッセイア▽にちなんで名付けられたフリー号のこの航海は、かえってオデュッセウスの冒険の航海よりも重大な示唆を私たちに与えた。△核▽によって、宙空にぶら下げられた状態となつている、人間と地球の未来に、今、私たちが何らかの手を下さねばならないことを、この航海は示している。

地球の新しい船出

1973年7月フランス政府は南太平洋ムルロア環礁で核実験を強行した。非難の声は世界的に高まり、とりわけ、オーストラリア、ニュージーランド両国では、実験地が近いことから、強力な抗議運動が行なわれた。ニュージーランドの反戦組織「ピ

ース・メディア」は、6隻の小船で実験海域に侵入し、さらにフリー号は（フランス海軍に逮捕された数日間を含めて）およそ8カ月にわたる抗議の航海を行なった。（労働党に政権が移ったばかりだったニュージーランド政府は、実験海域に無事到着できるように同国のフリゲート艦「オタゴ」を随行させた）

この航海の経緯は、△核▽が単なる机上の議論を越えて、人類（そして全ての生物）にとつての緊急・重大な危機を作り出しつつあることを、ニュージーランドと乗り組んだ各国の反戦運動者に印象づけた。彼らは早速、世界の人々にそれを訴えるための準備をはじめた。実際のところ△核の抑止力▽という言葉が米・ソの2大核保有国によって語られ、大国間の緊張の度合が高まるたびに、△核▽が戦略兵器と戦術兵器と

の間を行ったり来たりするという状態では、国際世論を喚起する以外に、△核▽を地球上から一掃する有効な方法を見出すことはできない。

1974年8月12日、20万人にものぼる人々の援助を得てフリー号は出帆の日を迎えた。14名の乗組員は、実に9ヶ国の国籍に分かれていた。（中に2名の世界市民会員が含まれていることは、更にフリー号の目標を明確にしめている）

「核兵器を地球上から一掃するためには、世界中のあらゆる立場の人々——農民も漁民も、教師も宗教者も子供も、そして広島・長崎の犠牲者も——地球という大きな船に乗っている家族全員が、一緒に力を合わせなければならない。」という主張は、おそらく乗組員全員の完全に一致した見解であるだろう。この主張を具体化するものとして、一風変わった著名カードが積みこまれた。2枚が一組となっており、片方に著名してフリー号に託し、もう一方を手許に置いておく。乗組員の表現に即して言えば、この手許に残した一枚のカードを「平和の種子」と呼ぶ。その託された著名カードを著名者の指定する核保有国の首脳に届ける

というのが、この航海のひとつの重要な目的ともなっている。

9月タヒチ。10月フィジー諸島。11月エリス諸島。12月ギルバート諸島、マーシャル群島、マリアナ群島：：：2月22日、日本。

ウェリントンを出帆して25日目、フリー号は一年ぶりのタヒチを訪れた。実験地ムルロアに近い同島では、すでに1973年7月の核実験の影響が出ていた。

「当地では、あらゆる種類のニュースがはずんでいる。ジスカールデスタンの幾度かの声明にもかかわらず、更にもう一年、大気圏での核実験が行なわれるとの噂が強く信じられている。しかし当局は地下核実験のための新しい適当な地点を見つけるのに困っているようだ。実験の後で、原子力委(CIEP)はタヒチでは牛乳を、マンガレワ(カンビエル)では果物や野菜を買い取って、全部処分した。ガンと白血病の発生が高まり、汚染した魚はいたる所で見られ、毛髪が抜ける。ここでは状況は段々悪い方向へ進んでいる。」(W・R・I会員、マーチンの手紙)

無告の被爆者たち

米国の信託統治領、マーシャル群島ロンゲラップ島では同村々長ネルソン・アンジンが乗組んだ。1954年ビキニ水爆実験で最も大きな被害を受けた同島では、当時の全島民の4分の1にあたる20人がすでに死んでいる。しかし、米政府原子力委員はこの20人のうち、たった1人を実験犠牲者と認定したにすぎない。年2回の原子力委員の定期検診の意味が、この一事実からも浮かび上がってくる。信託統治領の島民は核兵器の効力を調べるための「モルモット」なのだ。そのことは前述のタヒチでもあてはまるだろう。都合の良いことに、ロンゲラップ島の現金収入の方途であるヤシ油は、放射能に汚染されたためにその用をなさない。つまり、ロンゲラップの被爆者たちは他所へ行って不利益なことを述べたてる心配がない、と米政府は考えていたのだ。逆に、ロンゲラップの核被害を調査する為に渡航しようとするれば、高等弁務官の入域拒否がまっている。

「核」文明への告発

2月22日フリー号は静岡県清水港にやっ

とこのことでたどり着いた。折りからの暴風雨でジブマストは折れ、主帆はズタズタというありさまだった。その状態は、これまでの1万マイルを越える航海が、文字通り命がけのものであったことを私たちに暗示する。そして、南太平洋の島々の核被害がそれほどまでにさし迫った問題となつていくことをも示しているだろう。

自らの国土とは遠く離れた島々で実験を行ない、放射線障害を筆頭とする数多くの核の悪影響をおおいかくすことで、核兵器の存在を単に軍事的な側面においてしか論議することが出来なくなっている。それが先進文化国家のほとんどの状況だろう。私たちが核の恐怖にいつの間にか慣らされてしまつて、日々の生活が「核戦略」の微妙な均衡と背中合わせに営まれていることを殆んど意識していない。今、南太平洋、ミクロネシア・ポリネシアの島々に住む国家を持たない人々の現代史によって、それが撃たれているのだ。

X X X